

教員の近況

川 森 博 司（民俗学担当）

二〇二二年度もコロナ対応の影響下にありましたが、対面授業が全面的に復活し、マスク状態の中で日常性回復に向けての歩みを進めました。そのような状況の中で、個人レベルの研究としては、「異類婚姻譚」（人間が人間以外の存在と結婚する話）についての単著の書き下ろし作業に取り組みました。博士論文をまとめた『日本昔話の構造と語り手』（二〇〇〇年）以降の口承文芸についての研究の集大成的な側面もあり、その中で新しい発見もあって、わくわくしながら書き進めました（二〇二三年一月末刊行）。

このような文化史的な研究の一方で、「現代社会」の授業を充実させるべく、見田宗介の研究を媒介にして、柳田国男の民俗学を現代社会論に接続するための方法論的検討をおこなっています。このあたりの作業も二〇二四年度には論考の形にまとめていきたいと思っています。人生も六〇代の後半に入り、いよいよ「締め切

りのある人生を生きる」という課題が明確になってきました。「いつかはゴールに達するというような歩き方ではだめだ。一步一步がゴールであり、一步一步としての価値をもたなくてはならない」というゲーテの言葉を胸に日々を歩みたいと思っています。

齋 藤 瑞 穂（日本考古学担当）

門司でフェリーに乗り込み、翌朝六甲アイランドにおり立った日から、あつという間に一年半が経ちました。

着任一年目の二〇二二年度は、行吉学園教育・研究助成費（研究部門）の採択を得、豊岡市大篠岡散布地の試掘調査を実施しました。地権者の方々や区長さん、豊岡市文化財室をはじめ、御高配賜った皆様方には心より御礼申し上げる次第です。

基礎演習・史学演習の授業では、前期に神戸市埋蔵文化財センターを、後期に垂水区五色塚古墳を訪ねました。足を運んだ経験があるとはいっても、川西宏幸先生に連れられて関西を歩いた大学院三年目の初夏でしたから、二十年ぶりになります。いま、学芸員課程の資料保存論の講義を御担当いただいている秋山浩三さんに大阪

でお目にかかったのも、この時でした。客気だけで動いていた過去を想いつつ、神戸で考古学を学べることにあらためて喜びを感じています。

【二〇二二年度の研究活動】

〈論文〉

- ・「須玖式土器の細別と大別」『考古学雑誌』一〇五一、二〇二二年一〇月
- ・「陸中・山田湾におけるパブリック・アーケオロジイの実践と縄文三陸津波研究」『第一回日本災害・防災考古学会研究会資料・予稿集』、二〇二二年九月（共著）

- ・「縄文三陸地震津波研究5——「縄文海進」定着後の天変地異と陸中・山田湾——」『第十回歴史地震史料研究会講演要旨集』歴史地震史料研究会、二〇二二年十一月（共著）

〈研究報告〉

- ・「災害考古学の方法と資料」、第十六回「災害文化と地域社会形成史」研究会、二〇二二年七月
- ・「陸中・山田湾におけるパブリック・アーケオロジイの実践と縄文三陸津波研究」、第一回日本災害・

防災考古学会研究会、二〇二二年九月（共同発表）

- ・「縄文三陸地震津波研究5——「縄文海進」定着後の天変地異と陸中・山田湾——」第十回歴史地震史料研究会発表、二〇二二年十一月（共同発表）

〈講演〉

- ・「海辺と山裾の弥生時代史」、福岡市埋蔵文化財センター令和四年度考古学講座「海と山がおりなす歴史」第二回、二〇二二年七月
- ・「弥生土器の始まりを考える」、二〇二二年度弥生時代講座聞いてなっとく弥生の世界第一回、二〇二二年八月

〈その他〉

- ・『すみあゝと——博物館学芸員実習記録——』二十五、神戸女子大学史学科（共編著）

鈴木 宏 節（東洋史担当）

二〇二二年度も新型コロナウイルスの影響のため、計画されていたモンゴル国での調査を再度延期しました。モンゴルとロシアは陸続きでもあり、はや泥沼のウクライナ戦争の行方も気掛かりです。そもそも戦禍を被っている黒海

沿岸地域は、かつて豊かな草原がひろがっていました。ヘロドトスが記録した遊牧民、スキタイ（前七〜前四世紀）が活躍した舞台であり、トルコ（テュルク）系遊牧民であればハザル（七〜一〇世紀）が本拠を構えていました。また、黒海北岸はクリム・ハン国というチンギス・カンの後裔国家が存続していた地域でした。あらためて一八世紀以降のロシア帝国による南下政策とその影響を問い直す日々です。

【二〇二二年度の研究活動】

〈論文〉

・「漠北回鶻汗國の突厥碑銘―希内烏蘇碑北面銘文的再検討―」『域外漢籍研究集刊』第二三輯、二〇二二年七月

〈研究報告〉

・「阿史那思摩―隋唐帝国に翻弄されたテュルク武人―」、連続オンラインワークシヨップ「武人たちのユーラシア―越境・征服・統合」（代表 東京大学杉山清彦）、第三回「テュルク／ソグド・インパクトの東西」、二〇二二年七月

松下孝昭（日本近現代史担当）

鉄道の誘致という課題を通して日本近現代史を透視しようとする研究を卒業し、軍隊の誘致と地域社会との関係性に関心を移してから、かれこれ十数年が経ちました。最近では戦後史にも視野を広げ、自衛隊の誘致をめぐる地域社会の動向にも関心を寄せています。その一環として、左記の論文を発表しました。

「日本再軍備をめぐる地域社会の葛藤―警察予備隊松本部隊の演習地問題を中心に―」（『史学雑誌』第一三二編第七号、二〇二二年七月）

一方で、今も時おり鉄道に関する原稿依頼も舞い込んできたりします。二〇二二年は日本の鉄道開通一五〇周年だったこともあり、次の論稿も寄稿しました。

「鉄道敷設法の成立と展開」（『運輸と経済』第九〇四号、二〇二二年一〇月）

今後は対象地域をさらに広げて、自衛隊の立地が地域社会にいかなる波紋をもたらすかという課題を歴史学的に追究していきたいと思っています。

村 田 路 人（日本近世史担当）

この一年間、さまざまなことがありましたが、最も衝撃的で悲しかった出来事は、いうまでもなく今年七月二十九日の梶木良夫先生のご逝去です。梶木先生と私は同年齢で、二〇代後半に、同じ学会の委員として、当該学会の記念行事を成功させるため奔走していたことが思い出されます。その後はあまりお目にかかることがなかったのですが、二〇二〇年四月に私が本学に着任することになり、思いがけず同僚としてのお付き合いが始まることになりました。二〇二四年度末と一緒に本学を定年退職するはずでしたが、もはやそれは叶わなくなっていました。本当に寂しい限りです。

ところで、私の日本史専門教育の経験も三十数年に及びますが、その間、古文書教育とともに重視してきたのは史跡の現地見学です。着任以来、授業には努めて学外史跡見学を取り入れるようにしています。大阪城や適塾など、大阪の史跡見学が主ですが、入門演習や基礎演習では、授業時間内に大学周辺史跡である須磨寺や旧西国街道などを訪れています。学生には、一般観光客ではなく歴史研究者としての史跡の見方を身につけてほしいと

願いながら史跡案内をしています。

【二〇二二年度の研究活動】

〈著書〉

・適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会編『緒方洪庵全集』第三卷（上） 和歌 書 著作（その二）

大阪大学出版会、二〇二三年三月（共編）

・摂津市史編さん委員会編『新修摂津市史』第二卷 近世・近代編 摂津市、二〇二三年三月（共編著）。執筆は、第一章「近世的秩序の形成」のうちの四節分、第二章「地域社会の発展」のうちの二節分、第三章「地域社会の諸相」のうちの二節分。

〈論文〉

・「近世における堤防保全策」『枚方市史年報』第二二五号、二〇二三年三月

〈史料集〉

・『豊中市文書館史料集4 中井家文書1 庄屋編』豊中市、二〇二三年三月（監修）

山 内 晋 次（日本古代史担当）

二〇二〇年の年明け前後から日本でコロナ禍が始まっ

たころ、自分などは、半年くらいすればそんな流行も終息し、またもとの生活に戻るだろう、と高をくくっていた。でも、その後の展開は、そんな安易な予測をみるとに裏切るもので、二〇二三年九月現在でも、その流行は収束したとはいえない。

日頃の授業で自分は、歴史には学ぶことがたくさんある、というようなことを口にするが、すくなくとも今回のコロナ禍に関しては、自分は歴史からなにも学んでいなかった、と反省している。

というのも、たとえば、第一次世界大戦中の一九一八年頃から世界的に流行し、結果的に一億人を超す死者をだしたのではないかといわれているスペイン風邪（インフルエンザ）の場合にも、一九二〇年にはほぼ終息するまでに三年ほどの月日を要している。

この歴史上の事例を参照すれば、今回の世界的なコロナ禍も、半年程度で収まるはずはなく、私の安易な予測などは、まったく歴史に学んでいない愚かな希望的観測としかいえなかったのだ。

あらためて、襟を正して歴史学を学んでいきたいと思う。

【二〇二二年度の研究活動】

〈論文〉

・“Volcanic native sulphur pebbles excavated from the near-shore deposits of Hakata Bay, Kyushu, Japan: Their formation, preservation and archaeological significance” (Co-authored), *Journal of Archaeological Science: Reports*, 45, 2022/10

・「硫黄流通史研究からみた博多港湾石積遺構の歴史的価値」、大庭康時編『博多津博多191―博多遺跡群第221次調査出土の石積遺構―（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1468集）』福岡市教育委員会、二〇二三年一月

〈学会発表〉

・「中華の秩序とミカン」、唐代史研究会二〇二二年夏期シンポジウム、熱海市、二〇二二年八月

〈講演〉

・「日本近世の航海信仰からみた古代の持衰」、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、令和4年度世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群第6回公開講座、福岡市、二〇二三年二月

吉村(森 本)真 美(西洋史担当)

二〇二二年度が最終年度となったイギリス帝国の〈不自由労働〉と、フェミニズムについての二つの科研での分担研究の延長線上で構想を練ってきた、新しい科研課題が採択されました。(「近現代イギリスにおける周縁的階層の家族―帝国内移動による〈親子離隔〉を中心に―」、基盤研究(C)一般、令和五―七年度、課題番号二三K〇二二九九、研究代表者)

今回は、西洋史ではなく「子ども学」の枠組みです。児童福祉研究において長らく自明視され、福祉行政の根幹をなしてきた「親と子のあるべき姿」を、その実態とともに歴史的な問題として問い直そうという試みです。学際研究としての子ども学の中で歴史学ができることは何か。福祉や教育、文学の方たちとの交流の中でほんやりと考え続けてきたことに、何かしらの答えが出せればと考えています。

【二〇二二年度の研究活動】*すべて森本真美名義

〈論文〉

・「四人労働と奴隷制―イギリス1830-40年代の刑罰改革における議論」、奥田伸子編『近現代における

る「不自由な」労働者を再考する―18-20世紀の英国・英帝国を中心に」、二〇二三年三月

〈研究報告〉

・シンポジウム『近現代イギリスにおける〈親子離隔〉』森本真美、並河葉子、奥田伸子、世界子ども学研究会第二九回研究例会、二〇二二年九月一日、青山学院大学、オンライン

・シンポジウム『ヴィクトリア朝イギリスの家族―周縁的家族と〈親子分離〉』趣旨説明、第二報告「救済」がもたらしたもの―チャイルド・リムーバルと被支援家族―』ヴィクトリア朝文化研究学会第二二回大会、二〇二二年十一月一日、早稲田大学戸山キャンパス、ハイブリッド

・「世界の子ども イギリス篇」へのコメント」、第六回「子どもの世界史」研究会、二〇二三年三月四日、京都大学 ハイブリッド

〈その他〉

・「コラム 子ども移民」、山口みどり他編『論点ジェンダー史学』、ミネルヴァ書房、二〇二三年